
水色の雨

矢島さとる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水色の雨

【Nコード】

N2066T

【作者名】

矢島さとる

【あらすじ】

小児白血病は骨髄移植によって治療成績が向上しているが、少子化の著しい日本では骨髄提供者は常に不足している。内科医、斉藤進は、一人の小児白血病患者の治療に苦悩していた。

米国では患者の両親で体外受精によって受精卵を作り、遺伝子が適合する弟妹だけを選び出して妊娠・出産させて骨髄提供者「救世主兄弟」を製造する試みが始まっている。今までは諦めるしかなかった病気の子供の命を救えるかも知れないが、人工的に骨髄提供者を作るといふ『神の領域』に人は何処まで入っていいのだろうか？

斉藤進は、患者を救う夢と厳しい現実の狭間を葛藤しながら治療を進める。

「うちの近藤准教授と眼科の梅村智恵先生って怪しくありませんか？」
黒っぽい丸首のシャツを着た後藤舞が、少し鼻をふくらませて俺に言った。

俺の名は斉藤進、三十二歳になって母校である私立中央医科歯科大学の血液内科学講師に昇任したばかりだ。居酒屋で俺の前に座っている後藤舞は今春、臨床研修医を終了して血液内科学教室に入局してきた三年目の女医だ。

我が教室の主任教授は帝都大学から赴任した土井幸三という日本でも有数の血液専門医で、その下には帝都大学からついてきた高田直也と、我が校出身のホープ、近藤賢治の二人の准教授がいた。白血病などの疾患を扱う血液内科は重症患者が多く、また骨髄移植など緊急性も高い仕事をする。昨今は緊急を要する仕事が多いキツイ部署には若い入局希望者が少ない。

教室には俺の二年先輩の宮崎講師、そして二年後輩の鈴木助教と、目の前で喋っている後藤医師が全医師で、四十人あまりの入院患者やその百倍はいる外来患者に比べるとどう考えても少ない陣容だった。高度先進医療が必要な重症患者を受け持ちつつ、医学生や研修医、看護師の教育に新薬や新しい治療法の研究と開発、そして学会でも活動する使命を果たすべく毎日遅くまで仕事に奔走する毎日を送っていた。

この夜も病棟で十時過ぎまで目が離せない重症急性白血病の子供を後藤と二人で診ていて、遅い夕食を近くの居酒屋で摂っていた。二人とも別に居酒屋に来たかったわけではなく、時刻が遅かったので居酒屋かファミリーストランしか開いていなかったただけだ。

「近藤先生の奥さんが二年前に胃がんで亡くなったのは知っているよな？」

近藤准教授と梅村医師の仲を怪しんでいる後藤に向かって俺は落ち着いて言った。彼女は明るい性格で頭の回転も速い女性だが、時々思い込みで突っ走る傾向もあった。

「はい。梅村先生は近藤先生の奥様の妹。そして、斉藤先生の大学の同級生だということも知っています」その梅村智恵と俺が学生時代の病院実習が同じグループで親しかったことまでは知らないようだな、と俺は思った。親しいと言っても色白で端正な女性である梅村とは気のおけない仲間としての付き合いに止まり、俺の彼女に対する片思いは実らず残念ながら男女の仲はなかった。

「よく知っているなあ……」俺が溜め息まじりに言うと、

「そんな暇があったら、もっと勉強しろとおっしゃりたいのでしょうね」と間髪を入れず言った後藤は、呼び出しがあるかも知れない携帯電話を気にしながらウーロン茶をチビリと飲んだ。

「そのとおりだ。……近藤先生には三歳の娘さんがいて、その子を梅村の実家の両親が面倒を見ているそうだ。梅村智恵もその家から病院に通っている。つまり近藤父娘は梅村家に住まわせてもらっている」

俺は後藤に説明した。そう言いながら、俺にとって梅村と近藤先生との接近は気持ちのよい話ではなかった。だから俺はまだ梅村を好き、いや憧れているのだと、後藤に話しながらに自己分析した。

「知っています」後藤は大きな瞳をクルリと俺に向けて言った。

「だから近藤先生と梅村が親しくても別に不思議なことではない」俺は少し強がった。

「そうなのですが、この間、二人が病院の職員食堂でコソコソと内緒話をしているのを見ました。その雰囲気結構深刻っぽくて、只ならぬ妖気を発していました」

後藤は確信に満ちた口調で俺に言い切ったので、俺は思わず吹き出してしまった。

「二人が男女の仲になっている、という意味か？」不服そうな顔をしている後藤に俺は、単刀直入に質問した。

「端的に言えばそうです」後藤は真顔でスパツと即答した。それから俺は一杯だけ頼んだ生ビールを一口飲んでから彼女に言った。

「何かこう… 証拠でもあるのか？」

「いえ、女の勘です」

後藤は医者のかげに非論理的な答えを口にした。医学は理系に分類されるが、実際に人相手の仕事をしていると理論や科学を超越するような症例にはいくつもぶち当たる。人体には例外が付き物で、医学は一般の人々が考えるような厳密な確実性は意外に少ない。例えば同じインフルエンザ・ウイルスでも違う人が感染すれば違う症状を出し、またある薬剤が効く人もいれば効かない人がいるように百パーセント確実に診断や治療ができる厳密な理系科学ではない。

「女の勘か…」俺は宙を見た。そういう男女関係についての勘は、概して男より女の方が数十倍鋭い。一度に一人の男からの子供しか胎内に宿せない女体が、自分の家族を保全する本能から派生した才能なのかなと余計な学説が俺の頭に浮かんだ。

「そういう勘は斉藤先生には皆無ですよ」五歳年下の後藤が俺を横目で見て笑った。

「皆無…。ひどい言い方だな」

「だって先週結婚した研修医の小田君と看護師の石川さんの話を、先生は同じ職場で毎日のように顔を合わせていながら全く知らなかったでしょ」後藤がセミロングにした亜麻色の髪を揺らせてフフと笑った。

「…ああ」確かにそうだ。いきなり石川看護師から結婚披露宴の招待状を渡されて驚いている俺を、その場にいた看護師たちがあきれ顔で冷笑していた光景を思い出して俺は思わず頭をかいた。

「あの二人は秘かに交際しているつもりだったようですが、女の私たち全員がとつくに勘づいていました」やや肉感的な後藤は、得意げな顔をして目の前に残っていたおにぎりを平らげた。

「女の私たち全員って？」俺は初めて知る事実には啞然として訊き返した。

「私と血液内科病棟の看護師全員です」

「全員……。な、なぜ？」

「具体的にどこがどうと説明はできませんが、二人の様子を見れば一目瞭然です」

「一目瞭然なんだ…」俺は二の句が継げなかった。女の勘は実に恐ろしいと思った。

二人で居酒屋を出ると後藤は、もう一度病棟に寄って白血病患者の様子を診てから帰ると俺に言った。「目下で未熟な者は他人の何倍も多く動け」と言う俺の教えを意外なほど素直に後藤は守っていた。

俺は「じゃあ頼む。何かあったらいつでも知らせて」と彼女に言うのと、自分のアパートに帰ることにした。

後藤と夜道で別れると、白い巨塔のような大学病院を遠くに眺めながら歩いた。ジメジメと湿気がまとわりつくような梅雨の暑さが地表に残っていた。明日は雨らしい。

帰宅してシャワーを浴びながら、俺は梅村智恵の顔を思い浮かべた。郊外の眼科医院の次女に生まれた彼女は、色が白くてお洒落な女性だった。地元の有名私立女子大を卒業した三歳年上の姉がいて、その人が近藤准教授のお嫁さんになった。

結婚式で見た梅村の姉さんは、丸顔の智恵よりも少し面長だが色白で端正な顔だちをしていた。結婚後はすぐに子宝に恵まれて幸せを絵に描いたような一家だと思っていたが、去年になって彼女は胃がんで急に亡くなった。腹痛で検査を受けて胃がんが見つかった時

にはもう手遅れで、進行の早い癌によって三週間で息絶えてしまった。

自分も仕事柄、病気で亡くなる患者さんを多く見送るが、死は誰にいつ襲ってくるかわからないとよく思う。『運命』という非科学的な言葉を日常的に実感しながら生活している。梅村の姉さんはそういう運命だったのかも知れない。次は自分かもしれない。

「別に近藤先生が先妻の妹と交際しても不思議はないじゃないか」
浴室から二DKの寝室にたどり着くと、俺はそう独り言を言っ
てベッドに横になった。何となく寝苦しい夜だった。

朝になって外来が始まる前に、昨晚から急性白血病で状態の悪化している五歳の家田健君の様子を病棟に見に行った。血球が極端に減った健君は、一般病室からナーズセンターの脇にある個室に移されていた。病室の窓からはどんよりとした曇り空が広がって見えた。

「おはよう」病室の扉を開けると、白衣を着た後藤がすでに健君を診ていたので、俺はまた少し感心した。後藤は俺に気づくと振り向いて「おはようございます」と一礼した。

「どう？」俺は化学療法で髪の毛が抜けて丸坊主になった健君に微笑みかけた。貧血が進んで青白い顔をした健君は、力なく俺に微笑んだ。お世辞にも元気とは言えない彼の額に手を当ててみる。昨夜からの高熱はおさまったようで少しだけ安心した。後藤が俺にカルテを見せながら小声で経過を短く説明した。彼の状態は芳しくはなかった。

今日の検査と抗生剤、そして念のため輸血の準備をするよう後藤に言い残した俺は、外来業務に行こうと部屋を出た。そこでバツタリ健君の母親に会った。

「あ、先生、おはようございます」

短めの髪の毛の母親のお腹は出ていて、すっかり妊婦になっていた。

俺は手短かに健君の深刻な病状を話すと、「ところで、お腹のお子さん
は順調ですか」と話題を変え努めて明るく訊いた。

「はい、お陰様で」

「お大事になさって下さい」

「ありがとうございます」

それから俺は病棟から外来にエレベーターで降りながら、健君の
両親と話し合った八ヶ月前のあの初冬の日の事を思い出した。

雪が降り出しそうだった寒いあの夜、病棟の面談室には俺と家田
健君の両親がテーブルを挟んで座っていた。市内の病院からこの病
院に運ばれてきた時の健君は完璧な急性白血病、つまりガン化した
白血病細胞が無秩序に増殖して正常な血球を造り出せない状態で極
度の貧血に感染症を併発した極めて重症の患者だった。

教授は俺に、診断を確定したら直ちに化学療法を行うよう指示し
た。入院後一週間で数々の検査をして病態を確定してから、連日抗
がん剤や輸血を一ヶ月以上にわたって繰り返した結果、健君の容態
は持ち直してきた。このまま化学療法を粘り強く続けて白血病細胞
を封じ込め、次に他人の骨髄を移植して正常の血液を造り出すよう
にしてやれば病魔を克服できる可能性があった。

だが、健君に移植する骨髄提供者が見つからなかった。少子化の
著しい日本では提供者を見つける事が難しい現状がある。

「骨髄バンクにも我々親族にも、健に適合する骨髄がないなんて…、
何とかならないですか」

健君の父親が悩みぬいた表情で俺に詰め寄った。彼の横には母親
も必死の目をして俺を見ていた。

「健のためなら自分の命を捧げてもいい。僕たちはそこまで思っ
てるんです。なあ」

俺と同年齢の父親が言うと、傍らの母親も大きくうなずいた。

「これは倫理的にどうかと思うので他言無用に願いたいのですが…、

アメリカで行われ始めている方法をご紹介します」俺は少し迷ったが、家田夫妻の気迫に押されて口を開くと、彼らは身を乗り出した。「移植にはHLAと呼ばれる白血球の型合わせが必要です。赤血球のABO式の血液型は四種類しかありませんが、HLA型は数万通りの組み合わせがあります。親子でもまれにしか一致せず、他人では数百から数万分の一の確率でしか一致しません。HLA型が一致しなければ、他人の骨髄を移植しても拒絶反応を起こすだけで成功は得られないのです」俺の話の家田夫妻が固唾をのんで聞き入った。俺は言葉を続けた。

「ところが、HLA型は両親から半分ずつを遺伝的に受け継ぐため兄弟姉妹では四分の一の確率で一致します。端的に言えば、健君の兄弟が生まれれば骨髄移植のドナーになってももらえるかも知れませんが」

「…今から子供を作れば健を救えるかも知れないのですね。確率が四分の一でも挑戦したい」父親が宙を見て呻くように言った。隣の母親は考え込むようにうつむいた。

「通常の妊娠よりさらに成功率の高い方法は、不妊治療に用いられる体外受精の技術を使って受精卵を作り、その受精卵が細胞分裂しながら成長して八分割になった段階でHLAが適合した受精卵だけを選び出して母体に戻し出産する方法です」家田夫妻の必死の眼差しに逆らう事が出来ず、俺は話し続けた。

「骨髄提供者を獲得することを目的に、子供を半人工的に作る事が倫理的に正しいかどうかはわかりません。これはあくまでそういう可能性もあるという話です」俺は自分の持っている情報を残らず両親に提供して話を終えた。

俺の話は余計な負担を健君の両親に与えたかもしれない。そしてこの方法で健君を救えたとしても、それが人として正しい事をしたのかどうかはわからない。だが、両親のあまりにも必死の表情に、つい自分の胸の奥にあった話を彼らにってしまった。そしてこの話

をした事は上司にも教授にも言わなかった。いや、言えなかった。

その三カ月後のある日、健君の母親から「妊娠しました」とそつと俺に告白された。自然な生殖で妊娠したのか、あるいは人工授精で人為的に身ごもったのかを彼女は言わなかった。だが彼女の表情が晴れ晴れとして明るかったので、俺は心から「おめでとうございませう」と言えた。

あれから経った月日を数えると、あと三ヶ月ほどで健君の弟か妹が生まれてくる。仮にその赤ちゃんのHLA型が健君と適合したとしても、その子が一歳くらいになれば骨髓を提供できる体力が備わらないので、健君にはあと一年は頑張ってもらわないといけない。

今のところ健君は数回にわたる化学療法で白血病は落ち着きつつある。現時点での骨髓移植まで持ち込める可能性は五分五分だ。でも何とか彼を救いたいと、俺は強く思っていた。俺の下で働いていた後藤は俺の思いを肌で感じ取ったのか、彼女もまた必死に治療をしてくれていた。

週末に、我が中央医科歯科大学出身で小児科教室の吉川先輩が小児科の主任教授に就任した同窓会主催の祝賀会が行われた。市の中心部にある老舗ホテルで開かれた立食パーティーの会場には、同窓会の医師たちが百人ほど集まった。

「うちの大学は代々、帝都大学の連中に牛耳られている。その中で俺に続いて吉川君が主任教授になれた事は誠におめでたい」同窓会長の黒田病理学教授が持ち前の大きな声で怪気炎を上げて挨拶をしていた。

「お宅は近藤准教授が教授に昇進するよう、お前がしっかり支えてやれ」

歓談の時間になって偶然そばに来た黒田教授が俺に言った。あまり昇進には縁がないと思っっている俺だったが、自分と同じ大学出身者がトップにいれば誇らしい。ただ血液内科の土井教授に帝都大学から十年後に来た高田准教授と近藤准教授の年齢差は僅か二歳だ。今から十年後に土井教授が定年退官してから行われる教授選では生き残りを賭けた厳しい闘いが予想された。俺は黒田先輩に「はあ」と短く曖昧な返事をした。

今夜の主役である吉川新教授にも挨拶した。

「俺は患者さんのために、与えられた仕事に全力で取り組んでいた。そして気がついたら教授になれていた。お前もまずは与えられた目の前の仕事を精一杯やってみろ」今年五十歳になった吉川先輩は俺にそう言った。

パーティー会場では、その他に日頃お世話になっている先輩や俺を助けてくれる他科の後輩たちに一渡り挨拶して回っているうちに宴も終わりに近づいた。

「斉藤君」

俺が壁際でコーヒを飲んでみると、右側に梅村智恵がベージュのスーツ姿で歩み寄ってきた。

「ああ、久しぶり。来ていたんだ」こういう会にはあまり出席しない梅村に思いがけず会えて、俺は嬉しかった。

「学会があつてね、さっき来たばかりよ」今来たばかりのせいか、梅村智恵が声を弾ませて言った。

「それは大変だったね」

「此処が会場から近かったので食事でもできないかと思つて寄つただけ、もう宴会も終わりみたいね」梅村が周囲を見て少し残念そうに言った。

彼女の容貌は学生時代のままの愛らしさを残していた。その当時、俺は彼女を好きだった。でも彼女は先輩と付き合っていた。卒業後、梅村はその人と別れたと風の噂に聞いたが、俺には看護婦のガールフレンドができていた。その彼女とは一年あまり付き合ったが別れてしまった。

「良ければ、その辺で飯でも食う？」俺は思い切つて彼女を誘つてみた。

「斉藤君はもう食べたんじゃないの？」

「いや、いろいろな人と話していたから、ほとんど食べられなかった。すぐそばに小料理屋があるから行つてみよう」俺は梅村を促すと、終わりかけたパーティーを後にして繁華街に出た。

土曜日の街は若者で賑わっていた。外はまだ明るく昼間の蒸し暑さが残っていて、歩いていたらスーツの下にはうっすら汗が滲んだ。通りから一本奥まった所にある小さな和風の店先に『とり重』という看板がかかった小料理屋に入った。出てきた和装の若い女店員に、「ちようどお部屋が空いています」と奥の小じんまりした個室に案内された。

「いい雰囲気のお店を知っているのね」梅村がニコヤカに座ると、俺は上着を脱いで彼女の前に座った。この店は前に接待で一度だけ来た事のある店で、地元産の鳥をメインに使った料理を出す店だった。まずは生ビールを飲みながら、彼女の仕事について訊いた。

梅村は実家の眼科医院を継ごうと思つて眼科学教室に入った。六年ほど修行したら父親の診療所を手伝おうと考えていたが、駆け出しから親身に指導してくれていた女医の山本講師から頼りにされて抜けるに抜けられず現在に至っている。論文の実績が少ないので身分は助教で、講師に昇格する当てはない。

そんな状況下で先月は事故で眼球を痛めて手術した患者が結果的に失明してしまい、「治療に不備があつた」と訴訟を起こした。その緊急手術を担当した同僚医師は、多忙な診療の合間に裁判にも対応している間に「うつ病」になつて休職してしまつた。

「惨憺たる状況で、一時は私も辞めようかと思つたくらいよ」彼女は言つた。

内科でも去年、俺の後輩医師が救急外来に来た五十歳女性の急性腹痛患者が帰宅後に死亡し裁判になつている。深夜に外来を訪れた患者に対して腹膜炎や虫垂炎を想定した検査を行い結果はすべて異常がなかつたので痛み止めを処方して帰したが、翌朝その患者は亡くなつた。調べてみると死因は驚いたことに子宮外妊娠による腹腔内大量出血だつた。女を診たら妊娠と思えと研修医時代に習つたが、五十歳での妊娠は想像を超えた事態だつたと思う。

遺族の無念さはわかるが、何でも裁判になる今の状況には疑問を感じる。訴えられた後輩医師は、仕事の他に裁判を抱え疲れ果てて病院を去つた。明日は我が身かもと思う。

「今は大丈夫なの？」

俺は心配になつて梅村に尋ねた。

「もつ忙しい状況に慣れてきたみたいで体重なんかむしろ増えたくらいよ」

二人で思わず笑いあつた。梅村がいつものような綺麗な笑顔になつたのでホツとした。改めて彼女の姿を見ると中肉中背の体型は昔とちつとも変わらないが、心なしかウエストが一回り大きくなつたようだった。

「でもさ、この医療情勢では今の病院を辞めても何処でも厳しいよ」俺は実感を込めて言つた。救急医療は不規則な生活を強いられ、その上に裁判や雑用も多くて何処でも厳しい。

「そうだよ」梅村はうなずいた。注文した前菜や鳥の刺身、焼き鳥などをつつきながら更に焼酎なども頼んで酒も進んだ。

「前に付き合つていた男がいたんだけどさ…、別れちゃつた」少し酔いも手伝つて彼女の口が滑らかになつてきた。学生時代に噂のあつた先輩のことかな？と俺は思いつつ、「どうして？」と訊いた。

「彼は格好良くて話も楽しくて好きだつたんだけど、何年かするうちに何か合わない気がして…」

「どう合わないの？」

「何て言うか…志が低い男と言うか…。その上にその人がこともあろうに私の親友を好きになつちゃつて…」彼女は少し言葉を詰まらせて、一口焼酎を飲んだ。

「シヨックだつた。おまけに別れてからも、その二人は近くにいたので見たくなくても見えてしまつて」と言つとまた焼酎をあおつた。「それは辛いね。何年前の出来事？」俺は訊いた。

「もう五年も前。…それから三十歳になる手前で結婚に焦つていた頃にもう一人、付き合いかけた男はできたけど、ちよつと遊び人風の男でね、他にも女がいそいな気がしたから自分のほうから離れちゃつた」

「他に女がいるつて確かなの？」

「いえ、女の勘。でもそういう事つて何となくわかるよ」女の勘か…。俺は後藤の顔を思い出した。

「もう遊びだけで付き合える年齢でもないしね。それと傷つくのが

怖くなったのかなあ？」梅村はふと遠くを見るように言った。二人の間に沈黙の時間が流れた。

店員を呼んで焼酎からウーロンハイに切り替えて、俺は自分なりの意見を少し考えて整理してから口を開いた。

「親友に彼氏を盗られたのがショックだったんだろうね。それがトラウマになって恋愛に積極的になれないのかも知れない」

「なるほど…。あれ？ 斉藤君は心療内科医だったっけ？」梅村が微笑んだ。

「違うけど、ある作家が書いたエッセイを思い出したよ。仕事で受けたストレスは仕事で成功するしか解決できない。気晴らしのつもりでゴルフでも、そこで受けたストレスはゴルフでしか癒せない。その理論で言えば、男で受けたストレスは男でしか癒せない。逆に言えば君のそのトラウマは新たな男女交際が解決する」

「フフ、なるほど。そうかも知れない」

「過去は過去として前を向いて前進していれば、いつかきつといい事があるさ。仕事でも何でも同じだと思う」と俺は言った。

「… 斉藤君は今までどんな恋愛をしてきたの？」梅村もウーロンハイを頼んでから俺に向き直って訊いた。

「俺って、医者になって三年目から二年間、場末にある港病院に行かされた」

「過酷な病院で働いたんだね。斉藤君は昔から頼まれると嫌と言えない性格だから…」

「ハハ。そこで同僚だった五歳年下の看護婦と付き合ったんだ」

「ふーん、ありがちな話ね」

「その女が清楚な外見とは異なりなかなか凄い奴だった。一年付き合って、彼女が自分の他に二人も彼氏を作っていた事がわかつちゃった。最後は現場に踏み込んで修羅場だった。悲惨なまでにボロボロになったよ」

「…」

「誰だつて自分が傷つくのは嫌だ。その時は二度と女性と付き合いたくないと思つたけど、人と人との交わりは元来楽しいものだし自分を高めることにもなる。これは何も男女関係に限つた事ではないだつて人間は太古の昔から集団生活してきた生物だからね。大学に帰つて来てからは、殻に閉じこもるより前に進もうと思つようになつた」

「そつだね。でも時に前向きに生きる事に疲れてしまふ事があるのよ」梅村の表情が曇つて意味深なため息をついた。

「前向きに頑張る事は悪い事ではないけれど、時には肩の力を抜いて少し視点を変えてみるのも良いかもしれない」俺と付き合わないか？と言いたかつたが声には出さなかつた。

「…それって私を遠回しに口説いてる？」梅村が俺の心を見透かすように少し笑つた。

「ハハ、まあそんなところだ」俺も笑つて彼女の言い分を認めた。

すっかり話し込むうちに閉店時間になつてしまい店を出ることにした。外に出ると雨が降つていた。もう少し梅村と飲みたい気分だつたが、彼女は俺を寄せ付けぬ雰囲気で「帰ろうよ」と通りでタクシーを拾つた。

「斉藤君の携帯の番号とメルアドを教えてください？」タクシ―に乗り込んだら梅村が俺に言つた。

「ああ、もちろん。いつでも連絡して」

「ありがとう。またいろいろ話したいわ…」そう言つと彼女の表情が急に陰つた。俺は気になつたが、タクシーが森林公園近くにある彼女の自宅に着いたので、それ以上は話せなかつた。梅村家はモデルハウスのようなモダンな家で、その中に近藤准教授親子も同居している。彼女は車を降りると俺に手を振つてからすぐに門の中に姿を消した。後ろ髪を引かれるような気分のまま、俺は運転手に自分のアパートへ向かうよう告げた。

アパートの部屋に帰ったら早速、梅村からメールが着た。

「今日はありがとう。久しぶりに楽しい時間を過ごせて幸せでした。いろいろ話してくれて、また聞いてくれて本当にありがとう。また誘ってね。おやすみなさい」

メールを見て、俺は幸せな気分だった。梅村と話せた事が楽しかったし、また会いたいと思った。でも同時に彼女が見せた暗い陰が気になった。

「救世主兄弟という言葉を知っていますか？」夕方、病棟回診を終えて廊下を歩いている時に、後藤舞が俺に言った。俺は一瞬ギクツとした。

『救世主兄弟』とは、難病の子供の臓器や骨髄移植のために両親が作る弟や妹の事だ。今までは諦めるしかなかった病気の子供たちを、新たに生まれてきた弟や妹の臓器や骨髄などによって命を救う。両親にとってはまさに医学の進歩が神さま以上に思えるかも知れないが、こういう命の救い方に論議もある。

俺は死の淵にあつた急性白血病の家田健君の両親に、後藤の言った『救世主兄弟』について話したことがある。その後、健君の母親は身ごもった。そしてあと二カ月あまりで健君の弟か妹がこの世に生まれる。

「その言葉は知っている」家田夫妻にその話を伝えた事は、後藤にも教授にも言っていないかったので俺は素っ気なく答えた。米国では体外受精によって受精卵を複数作り、兄妹と遺伝子が適合するものだけを選び出して妊娠・出産させる『救世主兄弟』が既に何百人と生まれているそうだ。

生まれる前からドナーとなることを期待され、「救世主兄弟」として生まれた子ども自身の気持ちはどうなのだろう？

H L A型が合わない受精卵を捨ててしまうことは倫理的に許されるのだろうか？

こういう方法での救命に、俺は若干の違和感を感じる。

「H L Aの合う弟か妹が生まれたら、健君は助かるかもしれませんね」俺の心の葛藤をよそに、何も知らない後藤は大きな目を輝かせて言った。

「そうなんつても問題になるのは本人の同意だ。一歳の子供に『兄を救うためにお前の身体から骨髄を取っていいか?』と尋ねて同意を得る必要がある。でもそんなの本人にわかるはずがない」ナースセンターに戻ると、俺は後藤を諭すように言った。

「未成年者は親が同意を代行できます」

「そうだ。だから健君の治療は全面的に両親が決める事になる。提供者の意思はまったく関係ない」

「…厳密に言えば、そうですね」そう言うと後藤は考えるように黙った。

「斉藤先生、時間外外来からお電話です」看護婦の一人が俺の背中に声をかけた。

「あ、今夜は当直だった」俺はナースセンターの壁にかかっている時計が六時を指しているのを見てつぶやいた。

「私も泊まります」後藤が言った。

「いいよ。君は一昨日の晩に当直したばかりじゃないか」年下の後藤は当直回数が俺より多い。医者の世界は昔から封建的だ。

「先生が外来に行っている間に家田君が急変したら困ります。病棟は私に任せて、先生は外来に行つて下さい」後藤は凜として言った。当直医は一晩中働いても翌日は通常業務をこなさなければいけない。そんな状況は日本の何処でも昔から日常的に行われていて、医者の使命感とやる気のみを支えられている体制が医療崩壊を更に進めている気がする。

一昨日の晩は後藤が当直医だったが、病棟の重症患者が亡くなったので俺が呼び出された。彼女は時間外外来で発熱や胸部痛患者の対応に追われていたからだ。教室の中の独身で病院の近くに住んでいる俺と後藤が、どうしても呼び出される回数が多い。

夜十一時から病棟で危篤状態の骨髄腫末期の高齢男性の処置を始めつつ患者の家族を呼び出し、その患者の最期を看取ったのは午前二時だった。ナースセンターで死亡診断書を書いていたら後藤が現

れた。

「斉藤先生、すみませんでした。やっと時間外外来が落ち着いて……」
「お疲れ様。すべては無事に終わって、今から霊安室へお焼香をしに行くところだ」

「私も行きます」夜の暗い廊下を二人で黙々と歩いた。患者が亡くなるたびに自分の無力さを感じる。医学が進んでも助かる命は一部だ。

地下一階にある霊安室に行くと、亡くなった患者の家族が四人ほど集まっていた。その中にいた患者の妻である老女が俺たちに「お世話になりました」と、深々と頭を下げた。

「力及ばず残念です」俺は白いハンカチを握り締めた老女に頭を下げると、焼香台で合掌して再びお辞儀をした。後ろにいた後藤が俺にならって焼香してからお辞儀をした。

「後はやっておきますので、先生はどうぞお帰り下さい」霊安室を出ると後藤が後ろから俺に言った。

「うん、頼む」俺はそのまま医局に帰るとソファの上にゴロンとした。時計を見たら午前三時だったのは覚えているが間もなく俺は眠ってしまった、気づいたら朝になっていた。

自分のロッカーから歯ブラシを出して歯を磨いてから顔を洗った。それから当直室の脇にあるシャワー室でシャワーを浴びてから外来に降りて次々とやって来る患者たちを診た。

あれから三十時間ほど経った今は、俺が当直医だった。時間外外来には内科医が一人で、日ごろは診ない循環器や消化器の患者にも対応しなくてはいけない。心身ともにプレッシャーのかかる仕事だ。せめて病棟の仕事は私がやりますという後藤の健気な申し出は嬉しかったが、彼女は疲れているに違いない。

「今夜は帰れ。家田君も落ち着いている」

「……じゃあ、病棟をもう一度回って落ち着いていたら帰ります」
階下の時間外外来に降りて三人ほど患者を診たら手が空いた。「医

局にいる」と外来の看護師に言い残して五階に上がると医局の扉を開けた。中には後藤がいた。

「何だ。まだいたのか」

「はい。冷凍のグラタンを買ってきたので一緒に食べませんか？」

「ああ、ありがとう」

「今から来月の学会発表の資料を作るので時間があつたら見て下さい」

「ギブ・アンド・テイクか」俺が笑うと、

「そういうことです」後藤がチョロツと舌を出した。電子レンジの中で十分ほどして出来上がったグラタンを二人で食べながら後藤の資料に目を通した。

内容は最新薬を使って家田健君を治療した経過報告だった。米国では承認されている薬が日本ではまだ治験段階で一般には使えなかった。日本の行政のどこかに問題がある気がするが、政治の素人の俺にはわからない。だが、先進国の中で新薬の認可が一番遅れていることだけは歴然とした事実だ。

この薬で健君は一時かなり持ち直した。副作用もあるが、注意して使えばかなり有効な武器になる。海外ではすでに多くの治療成功例が報告されている。

「健君の白血病が制圧できて、骨髄移植に持ち込めるといいなあ」後藤が独り言のようにつぶやいた。ペットボトルのアイスティーをガブ飲みしながら俺もうなずいた。

健君の弟か妹の誕生まで、あと二ヶ月だ。最近の後藤は必要以上に健君に感情移入をしている様子だが、彼の治療に長く携わっている俺にもそういう感情は湧いている。

もし数パーセントでも自分の息子が生存する可能性があるのなら、それを追求したいのが親心だ。そういう心情は十分に理解できるし、生まれてくる子も『兄を救いたい』と思わないはずはない。そういう事にしよう。

ふと気づくと後藤がコンピューターの前に器用にうつ伏せて寝息を立てていた。彼女の肩に白衣をそつと羽織らせてから、俺は脇にあるソファアの上にゴロリと横たわった。最近横で寝ている彼女と一緒にいる時間が生活の大部分を占めていて、何だか彼女と此処で一緒に暮らしているような錯覚を覚えた。

それも悪くないか…、というホンワカした気分の中で俺はまどろんだ。

四。

週末は夕方から市内のホテルの会議室で小さな研究会があった。弁当を食べながら忌憚なく意見を交換する会合で、他の大学や病院の中堅の先生たちと自由に話し合えた。

それが終わってから、中央駅のタワーホテルのバーで梅村と待ち合わせた。彼女から飲みに行きたいと誘われたからだ。

待ち合わせのロビーには梅村がシックな色のスーツを着て立っていた。

「ごめん。待った？」と俺が声をかけると、「いえ、私も今来たところ」と微笑んだ。

ホテルの天辺までエレベーターで一気上がった。入り口のポイに「二人だけ座れますか？」と訊くと、「此処の席なら空いております」と答えた。そこには背もたれの高い、見るからに高級そうなソファアが夜景を見る方向に置かれていた。

「ここがイイ」と梅村が言ったので、二人で夜景を目の前にして深々とソファアに腰を下ろした。

「滅茶苦茶ロマンチックな席だね」俺は目の前に広がる夜景を見て思わず言った。

「本当ね」俺の左側に座った梅村が微笑んだ。

「好きでない人と結婚できる？」二人で二杯めのジンロックを飲んだところで梅村が俺に訊いた。

「一夜だけの関係ならともかく、結婚はできないだろう。だって結婚は共同生活。好きでない人と共に白髪が生えるまで生活するなんて無理だろう」梅村の真意を測りかねた俺は、少しドギマギして答えた。

「だよね…」梅村はそう答えると夜景に目を移した。彼女の切れ長

の瞳に街の灯りがキラキラと映った。

「じゃあさ、愛する者のために自分を犠牲にできる？」梅村が前を見たまま言った。

「一体どうしたんだ……」

「答えて」梅村は哀願するように俺を見た。

「愛の深さにもよるけど……多分できる」彼女の気迫に押されるように俺は答えた。先日の彼女の陰りのある表情を思い出した。梅村は何か重荷を背負っている気がした。

「子供のためなら？」梅村が潤んだ目で俺に問いかけた。

「それはできると思う。俺の職場では子供も亡くなるんだ。そういう場合、親は決まって自分が代わってやりたかったと言って泣く。たまらないけど、きっと自分もそう思うんだろうなあ」家田夫妻の必死な顔を思い浮かべながら俺は答えた。

「そうだよね……」梅村は何かを考える表情をした。それから彼女はジンロックのお代わりを、俺はウイスキーの水割りを頼んだ。束の間の沈黙が二人を包んだ。空には一雨来そうな黒い雲が押し寄せて来た。

「私が、今夜は帰りたくないと言ったら斉藤君はどうする？」沈黙を破って梅村が俺に言った。

「……そんな事を言うとなんか俺は狼になってしまふ」唐突な梅村の言葉に俺は妙に喉が乾いてきて水割りをグイッとあおってから答えた。俺の左腿に彼女の右腿が擦り寄った。

「狼の斉藤君も多分素敵よ」梅村の眼から先ほどの翳りは消えて、今は妖しい光を放っていた。

「私を嫌い？」

「バカ。嫌いなら此処に来ない。好きに決まってる。ずっと前からだ」

「私も貴方を好きよ。ずっと前から」

「……じゃあ、このホテルに部屋を取って来る。据え膳食わねば男の

恥、女に恥はかせない」

「アハハ、さすが斉藤君ね。でも、武士は食わねど高楊枝という言葉もあるわ」

「俺はそんな聖人君子ではないよ。昔から」

フロントに下りて尋ねると、スイートルームしか空いていないが夜遅いのでダブルルームの値段で結構ですと言われた。俺たちはキーを受け取ると部屋に上がった。

「素敵なお部屋ね」眼下に広がる市街を窓から見た梅村が、はしやいだ声で言った。俺は何も言わず彼女を抱き寄せて唇を奪った。

彼女は目を閉じて俺に身を任せた。欲情のままに彼女をベッドに押し倒して服をはぎ取った。思ったよりも豊かで張りのある彼女の胸があらわになった。

「シャワーを浴びさせて……」彼女は喘ぐように俺の下で言った。俺が彼女を解放すると、彼女は浴室に消えた。

俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出すとソファに座って夜景を見ながらそれを飲んだ。雨が降り始めて辺りが煙って見えた。何だか急転直下で夢のような展開だな、と思った。

「お先に」梅村が裸身に白いバスタオルを巻いて浴室から出てきたので、入れ替わって俺はシャワーを浴びた。身を清めてから浴室を出ると、薄暗くした部屋のベッドに梅村が横たわっていた。俺は彼女の横に身体を滑り込ませると、もう一度彼女を抱き寄せた。

「コンドームを持ってないから外に出すよ」俺が言うと、梅村が俺の腕の中で「安全日だから大丈夫よ」と微笑んだ。

ベッドの中では俺が彼女を求める以上に、彼女は俺を求め激しく身体を反応させ何度も「滅茶苦茶にして」と喘いだ。俺が彼女の中に入ると、彼女は身を震わせるように逝った。俺の身体を、稲妻に打たれたような衝撃が駆け抜けた。長年積もっていたマグマが一気に爆発するように二人は熱く燃えて互いを求め合った。

もう一度、彼女が極みに達してから俺は彼女の腹の上に抜いて果

てた。安全日とは言え、万に一つも彼女を妊娠させてはいけない。俺は梅村を好きだが、一生を共にするほどの覚悟はできていない。お互いにもっと話し合ってからにしようと、ギリギリのところまで判断した。

しばらく二人で息を切らせて抱き合った。そのうちに梅村が寝息を立て始めた。それを子守唄のように聞きながら、俺も眠りについていた。

目を覚ますと夜は明けていて、梅村は消えていた。テーブルの上にホテルの便箋が置いてあった。表には「斉藤様」と梅村の字で書いてあった。便箋の封を開けると中から紙が一枚出てきた。

『今夜はありがとう。とても嬉しかった。』

突然だけど、これから私は大病院を辞めて旅に出ます。いつかきつと事情を話します。いえ、話せる時が来るように頑張ります。

勝手を言っでごめんね。そして、ありがとう』

俺は呆然と立ち尽くした。梅村の時折みせる鬨りから、彼女は何かを悩み迷っていると感じていたが、彼女の抱える事情にはまるで心当たりがなく、またこういう展開もまったく予想外だった。

俺の夢が一夜にして実り、そして瞬く間に何もかもが崩れてしまった気がした。窓の外には雨が、まるで梅村を跡形も無く流してしまつたように激しく降っていた。

そこにけたたましく俺の携帯が鳴った。梅村からかと思つて慌てて電話を取ると、「先生、健君が大変です」と後藤の切迫した声が聴こえた。

「どうした」俺は現実に引き戻された。

「一時間前に痙攣して意識レベルが低下しました。血液検査では極度の貧血で、輸血を取り寄せていますが未だに到着せず血圧が下がってきて…」後藤が途方に暮れたように言葉を詰まらせた。

「熱は？」

「ありません。むしろ低体温です」

「昇圧剤を点滴しろ。すぐに行く」俺は電話を切ると急いで服を着てフロントに駆け下りてチェックアウトをすると、タクシーで病院に急いだ。雨の降りしきる日曜日の朝の街並みは、気味が悪いほど静まりかえっていた。

大病院の時間外外来の脇の通用口から五階の医局に上がると、ロッカーから白衣を出して着た。近道するために防火扉を開けて別棟五階にある血液内科病棟に急いだ。

ナースセンター脇の病室に入ると、両腕に点滴が刺された家田健君の向こうで看護師と輸血を準備していた後藤が「朝からすみません」と俺に言った。

「輸血が来たんだね」俺が少し安堵して言うと、後藤が血圧が四十しかないと半ベソをかくように言った。ベッド脇のモニターを見ると脈も微弱になっている。

「強心剤！」俺の身体を、この患者が死んだらどうしようという不安と緊張が走り、看護師に緊迫した声で言った。

「それは大人用の劇薬……」後藤が反対側の腕に輸血をセットしながら言った。

「わかつてる。緊急事態だ。あとステロイドを百ミリグラム！」

「そんな治療法も教科書にありません」後藤がうめくように言ったが、看護師は俺の指示に従ってテキパキ動いた。

このまま手をこまねいていても健君は死ぬだけだ。俺には二年間在籍した場末の港病院で、瀕死の子供に強心剤を投与して救命した経験がある。役に立ちそうな武器を縦断爆撃のように全部使う。最早理論ではなく、とにかく命が助かればいいと思った。

「後藤は早く輸血を入れるんだ」俺は看護師から強心剤とステロイドが入った注射器を受け取ると、目分量で点滴の側管から静脈へ薬剤を注入した。ほぼ同時に後藤が健君に輸血を全開で入れ始めると、少しずつモニターの脈拍が力強くよみがえってきた。

「血圧、八十の四十です」看護師が言った。後藤は健君の左腕から輸血を入れながら「健くん、がんばって」と必死な目をして言っていた。

五分ほどで健君の顔に血の気が戻り、十分ほどで意識も戻った。

輸血が終わる頃に、もう一度血液検査をするように看護師に言っていると、俺は病室を出て健君の家族に病状を説明した。

「先週まで行っていた化学療法が大変よく効いたのですが、血球数が下がり一時的なショック状態に陥りました。今日一日は予断を許しません、ここを乗り切ってくると白血病細胞はかなり退治できたと言えます」

「健は大丈夫でしょうか？」日曜だったので、健君の父親が来ていた。母親は臨月が近く今日は休んでいるらしい。

「彼は頑張っていますよ。少しずつ容体が持ち直しています」

「ありがとうございます」健君の父親が頭を下げた。俺がもう一度病室に入ると意識の戻った健君が俺を見た。

「気分はどうだ？」

「眠いよ」抗がん剤の影響で髪の毛も眉毛もすっかり無くなった健君が、思ったよりはつきり答えた。

「疲れていたんだよ。少し眠りなさい」

「うん」健君が目を閉じたら輸血を終えた後藤が、今度は注射器で採血をした。看護師に目配せすると、血液を受け取った看護師が検査室に走って行った。

「また君が呼ばれたの？」俺は後藤に声をかけた。

「はい。この間の学会資料を医局で作っていたので、来る事自体は大した手間ではありません。でも私の手に負えませんでした」

「いや、一番大切な輸血の手配をしたのは君だ。もう少し遅かったら危なかったよ」

そこへ看護師が検査結果を持って入って来た。血球は正常値の下

限まで戻っていた。

「もう大丈夫だ。点滴はカルテにオーダーしておくから、後はよろしく」俺は看護師に言つと、後藤を伴つて病室を出た。近くにいた健君のお父さんに「落ち着きました」と告げると、ナースセンターで今日と明日の点滴と薬剤のオーダーを後藤と一緒に書き直した。

「朝飯でもおごるよ」書き終えて後藤に声をかけると「もうすぐお昼ですよ」と後藤が微笑んだ。時計を見るともう十一時だった。

「本当だ。じゃあ、昼飯をおごつてやる」

「ありがとうございます。もう一度、健君を診てから医局に行きますので、先生は先に行つて待つていて下さい」後藤は飛びきりの笑顔になってナースセンターから元気よく出て行った。

医局に戻つた俺はソファにどかっと座ると、今日は日曜日で職員食堂が休みである事を思い出した。

「まいったなあ」俺は独り言を言つてから、何処で後藤と昼食を食べようか考えた。

結局、後藤の車で小さなイタリアン・レストランに行くことにした。職員駐車場に停めてあつた彼女の車は、若い女性には不釣り合いなリアウインドを真つ黒にシールドした濃紺のクラウンだった。父親が使わなくなった車をもらったのだと彼女は説明した。雨は上がつて夏の太陽が顔をのぞかせていた。

十分ほど走つて着いたレストランは木造で、店内には五つのテーブルがあつた。一番窓際の席に二人で向かい合つて座つた。

「後藤は、なぜ血液内科に入ったの？」俺は頼んだコーヒーを一口飲んでから訊いた。程良い苦さが口の中を駆け抜けた。

「小さい頃、親族が白血病で亡くなつていて…、なんて言つと格好いいのですが」後藤が悪戯っぽく笑つた。

「何だ、違つのか」

「うちの父は事業家で、私を医療ビジネスの起点にしようと画策して、医学部に入るように勧めました。私も医者になつたら金持ちに

なれると思ったので、素直に従って医学部に進みました」

「そうか…」

「でも大学で学んでいくうちに、医学はそんな生半可なものではないと思うようになりました。五年生の病院実習の時に、私は先生から内科を教わりました」医学生の実習は義務付けられているので、どこの大病院でも学生が医師の近くに立っていることがある。現場の医師にとっては臨床の傍らで学生にも医学を教えるので、忙しいと指導もついおろそかになる。残念ながら俺は彼女の医学生時代を思い出せなかった。

「看護科も含めると毎年たくさんの学生さんが来るので、先生は私を覚えていらつしやらないでしょうね」後藤が俺の気持ちを代弁するように言った。

「お恥ずかしいが、そのとおりだ」

「先生はお忙しい合間を縫って、私に内科学を一生懸命に教えて下さいました。一年間実習した中で一番印象に残ったので、研修医が終わったら此処に入ろうと思っていました」

「そうだったのか」

「でも人を助けられる医者になるには、まだまだ年月が要りますね。今日も私は自分の力不足を嫌と言うほど自覚しました。増して金儲けのために医者になろうとした事を今では恥じています」

「…今は何でも自分の血となり肉となる。何でも吸収しながら懸命に働くのがいい」

「はい」

「でもずっと全力疾走を続けることは体力、気力とも難しい。俺がそう感じ始めていたところに君が来てくれて本当に助かっている」
「こんな私でも？」後藤の顔が明るく輝いた。「大助かりだ」と俺が微笑むと後藤も嬉しそうに微笑んだ。

出てきたパスタを「いただきます」と言うや美味しそうにペロリと平らげた。俺も空腹だったので一気に食べた。食事を終えて周りを見ると、日曜のせいかな平和そうなカップルや家族連れで席が埋ま

って来た。

「出ようか」俺は後藤に言っただ店を出た。

「後藤は今から何処に行く？」助手席に座った俺が訊くと、「そうですね。少し休みに帰ります。先生は？」と運転席に座った後藤が訊いた。

「俺も帰る。悪いけどアパートまで送ってくれないか」

「お安いご用です」後藤が車を発進させると十分もしないうちに俺のアパートに着いた。

「よかつたら…、部屋に来ないか？」早朝、梅村に急に去られた俺は少し錯乱していたのかも知れない。とにかくこのまま一人で部屋に帰るのが嫌だった。一人になるのが怖くて後藤を誘っていた。

少し間を空けて後藤が「はい」と決心したようにうなずいた。アパートの駐車場に車を止めると、二人で最上階の五階にある俺のDKの部屋に上がった。

「少し片づけないと…」俺は思わず言った。ライティングデスクの周囲は書類や本に埋め尽くされたが、最近は自炊をする暇もないほど忙しかったので部屋自体は比較的きれいだった。

「片づけを手伝います」と近づいてきた彼女を、俺はおもむろにソファーに押し倒すと無心で彼女を抱いた。彼女はほんの小さく抵抗したが、すぐ素直に俺に抱かれた。

小ぶりながら肉感的な彼女の服をはぎ取ると、俺は自分の欲情をぶつけた。彼女に押し入った俺には、昨晩の梅村を抱いた時のような稲妻がかけぬけるような衝撃は感じなかったが、後藤を抱き終わった後には何とも言えない充足感と安心感に包まれた。

『女で受けた傷は女でしか癒せない』

ある作家のエッセイを引用して俺が梅村に言った言葉だったが、それを俺は体感した。俺を癒してくれた後藤を愛おしく思った。

五。

一年が経ち再び梅雨の季節が巡ってきた。

俺の前から姿を消した梅村智恵は、携帯もメールも通じず相変わらず音信不通のままだった。かつて智恵の同僚だった眼科医に訊くと、彼女は九州で開業していた叔父が急病に倒れ、その診療所を切り盛りするために大学病院を辞めた。教室員たちにも連絡先は智恵の実家しか知らされていないとのことだった。彼女の実家では相変わらず、亡くなった智恵の姉の夫である近藤准教授とその愛娘が智恵の両親と暮らしていた。

俺と後藤舞は、俺の部屋で半ば同棲生活を送っていた。後藤、いや、舞はコツコツ実績を積み重ねて春に助教へ昇進した。しかし今春、血液内科には新しい医師が入らなかったので、彼女は診療に加えて学会や教育活動が増えてますます多忙になっていた。

学会や当直も含めると、同棲と言っても生活はすれ違いが多かった。でも俺にとつての舞は、仕事でもプライベートでも欠くことのできないパートナーになっていた。それに彼女を抱くたびに、舞の俺に対する愛情が深まってくるのを体感する。

家田健君の母親は元気な男の赤ちゃんを十一月前に出産した。

卓と名付けられた健とHLA型のピッタリ合う弟から、いよいよ骨髓採取を明日実行することになっていた。

「今までよく頑張ったね」舞がクリーンルームで眠る健君の頭をやさしく撫でた。この一年の治療で彼の白血病細胞は死滅した。しかし移植後の拒絶反応を防ぐための免疫抑制療法によって、健君の正常の血液成分は激減して皮膚のあちこちは荒れ口内炎や下痢にも悩まされていた。彼の髪の毛は全くなく、発熱にも繰り返し襲われていた。

でも骨髄移植が成功すれば、これらの症状もすべて解決する。明日には俺と後藤が執刀して、弟の卓君から採取した骨髄を健君の身体に注入する。

それにしても、HLA型が適合する赤ちゃんが見事に生まれるとは、人工的に適合する受精卵のみを選んで『救世主兄弟』を製造したのではないだろうか？

だとしたら何処の医者がそれを実行したのだろうか？

若干の疑問はあるが、健君の両親はその事にまったく触れないので敢えて俺も何も訊かなかった。経緯はどうあれ、今は健君を救う事だけに集中しよう。ゴールは目の前にあると思った。

一夜が明けると、朝から手術室で全身麻酔のかかった卓君の骨盤から慎重に骨髄を採取した。皮膚が薄い腸骨と呼ばれる骨盤の一部に採取用の太い針を刺し、一つの穴から方向を変えながら骨盤から髄液を注射器で採取した。三つめの穴からの採取は舞にやらせた。「もっと腰を入れて」時おり俺は彼女の手を取って教えた。舞は額に汗を滲ませながらも当初の計画通り全部で五つの穴を空けて、それぞれで方向を変えて約五十箇所から髄液を採取した。

採取後は、髄液が骨盤から漏れないようにガーゼで圧迫して止血した。その間に俺は採取した髄液を一刻も早く健君に注入するように託すと、彼女はそれを大切に抱えて手術室を出て行った。

俺は十分後、出血が完全に止まったのを確認してから傷口にテープを張って手術を終了した。それを見届けると麻酔医が卓の麻酔を覚ました。約十分後、卓君が泣き声を上げて麻酔から無事に覚めた。万一この手術で卓君の命が損なわれたら、今までの苦労が水泡に帰す。想像したくもないような最悪な事態は免れて俺はホッとした。

病棟に上がると手術衣のままの舞が、髄液を健君に注入していた。昼過ぎにそれが終わると、新しく健君の体内に入った髄液に拒絶反応が起きないように、再び強力な免疫抑制薬を点滴に入れた。

また数日の間、健君が下痢や嘔吐、発熱や口内炎に苦しむ。だが今回の化学療法はゴールが見えている。二週間ほどすると、卓君の骨髄が健君に生着し始め、その頃から健君はメキメキ元気になり始めた。

「もう一ヶ月ほどで外泊させて徐々に慣らし、二カ月後には退院させて様子を見よう」

毎週水曜日の夜に行われる教室の検討会の際、近藤准教授が家田健君の治療方針を俺に命じた。最近は大井教授と高田准教授が不在のことが多い。舞が聞いた噂では、教授は母校である帝都大学の教授の座を狙って忙しい日々を送っているらしい。

「帝大の主任教授が学長に昇進して急にポストが空いたらしいです。でも私たちを見捨ててすぐに名乗りを上げるなんて……。此処は大井先生にとって出世への単なるステップだったんですね」舞はプリプリと怒っていたが、世の中はそんな話は五万とある。俺はそんな事は大きく気にしなかったが、近藤准教授は好むと好まざるに関わらず微妙な立場に立たされていると心配していた。

大井教授が晴れて帝都大学の教授になれた場合、ここの教授のポストを帝都大出身の高田准教授と争うことになる。同じような年齢の二人のうち、どちらが教授になっても敗れた方は大学を去ることになるだろう。

そんな事情はおくびにも出さず近藤先生は日々の仕事を精力的にこなしている。最近の彼は生き生きしているように感じる。何か勝算があるのだろうか？

「近藤君は東洋病院に行っているの？」

市内で開業している十年先輩の西口先生に訊かれた。俺は週一回、西口病院の夕方の外来に行っていた。薄給の勤務医のために先輩から頼まれたアルバイトなのだが、消化器内科出身の西口院長も

血液疾患の患者を診る俺を必要としていた。

「いえ、知りません」と俺は答えた。近藤准教授は大学傘下の城東市民病院へ定期的に行っているが、東洋病院へ行っているとは聞いた事がなかった。

「そうか。東洋病院は老舗の有名私立病院で院長は代々帝大出身だ。下で働く医師たちも全員が帝大の連中なのだが、実は整形外科に一人だけうちの出身者がいる。そいつは俺の同級生なんだが父親が帝大出身で、医師免許を取ったら帝大に入局しろと命令されて入った。でも結局は帝都大学内での出世コースから外されて、八年くらい前から東洋病院で働いている。内科と産婦人科がメインの病院の整形外科医だから、まあ閑職だ。

先週、そいつと久しぶりに飲みに行ったら、白衣を着た近藤君を病棟で見たと言っから気になったんだ」

「そうですか…」

「土井教授が帝大に戻った後は帝大出身の高田准教授がうちの教授になる、と決まったのかと思ったよ。うちの大学の教授はよくそういう決まり方をして、口の悪い連中からは帝大の属国と言われているからね」

「はい。でも帝都大学の方がいまだに教授の公募期間中で、決まるのは早くても三カ月くらい先だそうです。うちが決まるのは更にその後ですから…」

「甘いね、斉藤君は。この手の密約とは教授選前から動き出すんだよ。うちの教授は高田先生を昇進させるが、その代りに近藤君は伝統ある有名病院で帝大の牙城、東洋病院の内科部長か副院長あたりのポストを譲るといふ密約が成立しているかも知れない」

「…お見事な推測ですね」俺は西口先生の考えすぎという気もしたが、彼の話には一点の矛盾もなかった。

「ワハハ、そうだろう。君も身の処し方を考えておいた方がいい。こういう事は早い者勝ちだよ」西口先生は得意げに大笑いをして俺の前から去った。

最近は家田健君も大部屋に移れて元気になった。今は病棟も比較的落ち着いているので、今夜はまっすぐ家に帰った。五階の部屋に入ると、舞も珍しく帰って来ていて台所で料理をしていた。

「お帰りなさい」彼女の笑顔はいつ見てもいい。俺はホツとした気分です。料理を手伝った。

それにしても、舞が言うように男女の仲を嗅ぎわかる女の勘が異様に鋭いとしたら、俺たちが付き合っている事は病棟中の看護婦が察知しているのかな？

俺は舞の顔を見てふとそう訊きたくなつたが、それを聞いても仕方のない事だと思ひ直して、さつき西口先生から聞いてきた話をした。彼女は興味津津な様子で聞き入った。

外食で不足しがちな栄養素を補いながら手軽にできる豚肉と野菜のために、味噌汁とご飯の夕食を二人で食べた。会話は自然とこれからの教室がどうなるのかという内容になった。

「私は近藤先生が主任教授になつてくれる方がいいなあ」舞が遠くを見るように言った。

「やはり同窓生というのは何かしら繋がりがあつて親しみやすい」俺も同意見だつた。

「何か近藤先生のためにできることはないでしょうか？」

「特にない。俺たちは自分の仕事するだけだ。それが患者さんのためにになり、結局は人のためにもなる」

俺には三年目から二年間勤めた場末の港病院で強くそう思った。次々にやって来る貧困層や労務者、夜の女たちの重症患者の治療にあたっては、出身校や身分、男女などとは関係ない。金儲けにもならず、ひたすら身を粉にして使命を果たす『医療』のみを行う毎日だつた。

もちろん、時代を切り開く『医学』も大事だ。先端医学がなければ、家田健君も到底助かる見込みはなかつた。でも俺の本分は『医

療』だと思っ。

「それはそうですね」後藤はつぶやいた。

食事が終わって後片付けをしたら俺は机で、舞は食卓でノートブック型のパソコンと本を出して仕事をする。学会や研究会、そして学生の講義に院内会議の準備などを黙々とこなす。

明日は舞が、二日後は俺が当直だ。三日後は舞が西口病院の当直に出かける。その日から俺は教授と、京都の日本血液病学会でプレゼンするために二泊三日で出かける。順番に風呂に入って、お互いの仕事が一段落すると二人でベッドに入って愛し合ってから眠った。二人で身体を寄せ合っていると安らげた。

六。

京都での学会は、他の大学の最先端の研究や治療法を聞いたり討論し合う事が出来て充実していた。舞とは毎日電話をしていた。家田健君は順調に回復していると、舞は嬉しそうに俺に報告した。

学会が終わり、梅雨空の晴れない京都駅で新幹線を待っていると見知らぬ携帯電話番号から俺の携帯に電話が入った。

「もしもし、私、梅村です。智恵」紛れもなく梅村の声が受話器から聞こえた。彼女がホテルの部屋から昼気楼のように消えて一年あまりが経っていた。俺は驚いたが、同時にとても嬉しかった。

「もしもし、元気か？ 今どこ？」俺は矢継ぎ早に質問した。

「今は実家にいる。斉藤君の携帯番号が変わってなくて良かった。

…今からまたすぐに出かけるの」

「どこへ？」

「それは言えない。突然あなたの前から消えてしまつてごめんなさい。私は元気になっているから心配しないで。それを言いたくて…」

「例え短い時間でもいい。会えないか？」

「…正直に言えば、私はあなたに会いたい。でも会えばきつと辛くなる」梅村がそう言った時、新幹線がホームに入つて来た。

「どうして辛くなるんだ？」俺は新幹線に乗り込むとデッキに立つたまま電話を続けた。

「それを今は言えない。いえ、言う勇気がない。許して」梅村の声が泣きそうになった。

「…わかった。話したくなつたら、いつでもいいから話してくれ」「うん、ありがとう。ちょっと急ぐからまたね」梅村はそう言う一方で一方的に電話を切った。俺はしばし呆然とその場に立ち尽くしてい

た。京都を発車した新幹線の窓を、降り始めた雨の粒が横に走っていた。

窓の景色が山にさしかかった頃、ようやく俺は自分の席を探して座った。それから、今かかってきた電話番号を自分の携帯の住所録に登録して梅村智恵と名前をつけた。

俺は窓に叩きつける水色の雨を見ながら考えにふけた。梅村智恵は何かを俺に言いたかった。わざわざ電話してきたのだから、それは間違いない。でも彼女の置かれている状況は皆目わからず、彼女の言いたい事もまったく見当がつかなかった。いくら考えても堂々巡りで何も結論はまとまらない。梅村に会って話したいと思った。

駅に着き新幹線を降りると、俺は大学病院に向かった。三日ぶりに病棟に行くと、とにかく真っ先に家田健君を見に行った。

彼は六人部屋に移され、一番廊下側のベッドで横たわっていた。左腕にはまだ点滴が刺さったままで髪の毛もなかったが、皮膚炎や口内炎は治り血色もよくなっていた。弟の骨髄が一日と彼の身体に根付いて回復に向かわせていた。生命の神秘を感じた。

「先生はどこに行ってたの？」無邪気な表情で健君が俺を見上げた。「ちょっと勉強しに京都に行っていた」俺は彼の元気な様子を確認して安心した。他の重症患者を少し診てから、アパートに帰った。中では舞が食事の支度をしていた。

「お帰りなさい。思ったよりも早かったですね」

「ああ、学会は盛況で有意義だったよ」

「私も来年は行きたいです」

「そうだね。家田君に使った新薬の成果をまとめられたら発表してもらおうか」

「頑張ります」舞が嬉しそうに笑った。

それからいつものように食事をして後片付けを終えると、二人と

もパソコンで残務をした。しかし俺は夕方に聞いた梅村の声が頭の中で繰り返し聴こえ、仕事に集中できなかった。彼女は何を言いたかったのか……

「健君の弟って」舞が静かな部屋の中で突然独り言のようにつぶやいた。

「骨髄を提供した卓君か？」俺は我に返って答えた。

「はい。見事にHLA型が健君と一致したんですが、あれは偶然でしょうか？」舞の疑問は俺も感じていた事だ。でも敢えて見ないふりをしてきた。

「わからん」

「健君の母親は何か隠しているんです。私にはそれがひしひしと感じられるんです」

「また女の勘か？」俺は少し笑うと、舞は真面目な顔で俺を見た。

「はい。家田さんは時おり凄く暗い表情を垣間見せるんです。何かを隠し思い悩んでいるような陰を感じます。それが最近頻繁になってきました」舞は言い切った。

「そうか……」女の勘とは実に恐ろしい。今度からそういう目で母親を観察してみようと俺は思った。同時に俺は舞の前では梅村の事を考えないようにしよう。勘の鋭い舞に悟られないようにしてやろうと思った。

「もう寝ようか」俺は舞を誘った。ベッドに入って彼女を夢中で抱いていると梅村の事は忘れられた。心地良い充足感と共に果てた。

隣で寝息を立てて舞が眠った。俺は舞を愛しているし必要な存在だ。でも、梅村と一つになった時の稲妻に打たれたような衝撃は舞では得られない。雨の夜に梅村を抱いたあの目くるめくような感覚は忘れられない。

七。

梅雨が明けて真夏の太陽が容赦なく照りつけるようになった金曜日の夕方、骨髄移植を終えた家田健君がいよいよ外泊する事になった。彼は弟の骨髄液によって生き返った。

「発熱など体調を崩したらすぐに帰って来て下さいね」俺が健君の母親に念を押すと、横に立っていた健君が「わかってるよ」と返事をした。

母子は嬉しそうに手を取り合って病棟から出て行った。少しずつ外界に慣らしてやって、一カ月後には退院させる予定だった。

俺は病棟の仕事を終えて、医局で書類を書いていると夜の十時に携帯が鳴った。出ると病棟の看護師だった。

「家田健君が熱を出して帰ってきました」せつかくの機会だったのに残念。どうしたのだろうか俺は思った。

「医局にいるからすぐに行く。熱は何度？」

「三十八度二分です」

「血液検査の準備を頼む」電話を切ると俺は病棟に向かった。病室に行くとき健君がむくれた表情でベッドに寝かされていた。傍らには母親が寄り添っていた。

健君に血液検査をしてから点滴をした。母親は、久しぶりに家に帰って弟とはしゃぎ過ぎたと言った。検査結果は悪くなく、約一時間の点滴が終わる頃には彼はスヤスヤ眠りについていてた。

それを確認して帰ろうと、暗くなった深夜の病棟の給湯室を通りかかった時、健君の母親が給湯器の前でボウと幽霊のように座っているのを見つけた。

「お母さん、健君は大丈夫ですよ」俺が声をかけたら、彼女は飛び

上がらんばかりに驚いてこちらを見た。その見開いた彼女の瞳には、舞が言ったような暗くて深い闇が広がっている気がした。

「先生、ありがとうございます。あの…」母親の口元は何かを言いたそうに動いた。

「心配事があったら、何でも言っておきませう」俺は彼女の目を見て促した。数秒間、俺たちは見つめ合った。

「一番お世話になってる先生には言っておきたい話があります」母親は決心したような表情をした。

「まあ、座りましょう」俺は給湯器の前で丸イスを二つ出して向かい合わせに腰掛けた。

「今まで健を助けたい一心で頑張ってきました」母親は話し始めた。「それは私が一番よく知っていますよ」

「願掛けや祈祷はもちろん、ありとあらゆる事をしました。でも…、やってはいけない事までしてしまった気がするんです」

「と言いますと？」

「…この話は誰にも話さないつもりだったので、内密にお願いしたいのですが、…実は私、人工授精を受けました」

「はい」

やはりそういう人工的な操作をしていたか。偶然にもHLAがピッタリ合う兄弟が誕生するなんて出来すぎた話だ。俺は心の中でそう思いながら頷いた。

「採卵する手術はとても痛かった。でも健を救うためなら何でもできると思って頑張りました。夫の精子とで受精卵を作ってもらい、八個に細胞分裂したところで検査しました」

「健君のHLAに適合する細胞を選び出すためですね」

「そうです。その中で二つの細胞が選ばれて私の胎内に植えつけられました。結局、赤ちゃんになったのは二つの受精卵のうち一つだけでした」

「健君を救うため、一番確実な方法を実行したのですね」

「はい。でも、八つの細胞の内、六つの細胞は捨てられたんです。」

あの時は夢中で気づかなかったのですが、いくら健を助けるためとは言え、そんな事までしてよかったのか？と最近になって悩むようになりました」

「…」

「捨ててしまった受精卵も私たちの子供です。目の目を浴びたかったのではないかと…」そう話すと、健君の母親は口に手を当てて声を押し殺し両目から涙をこぼした。俺はそつと彼女の肩を撫でてやった。

「ところで健君の弟、卓君は元気ですか？」俺は言葉を選んで彼女に声をかけた。

「はい」すすり泣きながら母親は答えた。

「健君は卓君とはしゃぎ過ぎて熱を出したんですね。要するに兄弟はとも仲が良い」

「はい」

「よかったじゃないですか。例えどういう形でも無事に赤ちゃんが誕生して育っている。五体満足な子供が生まれてくること自体が、まさに神がお造りになった奇跡。その上に出産は子孫を残すための命がけの偉業。あなたはものの見事に元気な赤ちゃんを産んだ」

「…」

「おまけに兄弟は仲が良くて互いの存在を喜びながら生きている。物心ついたら卓君に、死にそうになっているお兄ちゃんを助けたいか？と尋ねてみて下さい。彼はきっと、もちろん助けたいよと答えます」

「はい」

「そしたら卓君をいっぱい誉めてやって下さい。もちろん健君にも、お前は弟の血で生きていると教えて下さい。彼らは世界一、絆の深い兄弟になります」

「はい」泣きやんだ母親の目に笑みが戻った。

「…ところで、そんな高度な医療を何処の病院でなさったのですか」

今度は俺の素朴な疑問をぶつけてみた。

「絶対に言うなと言われていたのですが…、近藤先生が病院を紹介して下さいました。これ以上は勘弁して下さい」母親がまた泣きそうなお顔になった。

「打ち明けて下さってありがとうございます。今は一緒に健君が治る事を願いましょう。そしてこの事は誰にも言いませんし、あなた方も誰にも話す必要はありません」俺はそう言い終えて彼女に一礼すると、病棟を後にした。

それにしても、健君の『救世主兄弟』作りを近藤先生が斡旋していたとは…。予想外の告白だったが、それ以上は俺の知らなくてもいい事。見ないふりをしよう。

「また近藤先生が東陽病院に白衣姿でいたそうですよ」日曜日の午前中、西口病院の当直から帰って来た舞が、部屋に入るなり俺に言った。

「西口先生からの情報？」

「そうです。どうやら子供の患者に骨髄移植をしたようです」

「骨髄移植？」

「謎の動きですよ。西口先生から、関連病院でもない所で働くとは一体どういうことか？と尋ねられました。でも、私たちは一切知らない。少なくとも教室からの正式な派遣ではないです、とだけお答えしました」

「まったくそのとおりだ」

「どうします？」俺は頭が混乱して、まずはコーヒーを淹れようと立ち上がった。台所のテーブルで冷蔵庫に保存してあったマンデリンの豆を二杯分、手回しの豆挽きで砕いた。次第に芳醇な香りが舞い上がってきた。

シャワーを浴びてきた舞が俺の前で、カップを出してからトーストを焼いた。俺はコーヒーマーカーに挽いた豆と水を入れてスイッ

チを押した。二人とも考え込むように無言でトーストを出しバターを塗って、カップにはコーヒーを満たした。舞はいつものように角砂糖を一つカップに入れた。一口コーヒーを飲むと、マンデリンの香りが口と鼻から入り頭が冴える。

「近藤先生って、最近機嫌がいいですよね」舞がポツンと言った。

「噂によると土井教授が帝大の教授になることはほぼ確実な情勢になってきた。気を揉んでいた事の一つが片付きそうだからではないかな」俺は自分なりの憶測を話した。

「そうですね。目上が一人いなくなったら、上のポストに行けるチャンスになりますものね。でもそれだけではない気がする……」舞がバタートーストをかじって言った。

「取りあえず俺たちは日常の仕事に打ち込もう。東洋病院での事は、必要があれば近藤先生自身から説明があるだろう。先生が何も言わなければ、それは俺たちとは関係のないことなんだ」俺が舞に言うのと、彼女は「西口先生も、これは確証がない単なるうわさ話。だから俺も半信半疑なんだとおっしゃっていました」と言ってから自分で納得するようにならずいた。

八・終章

それから一カ月した真夏のある日、順調に回復した家田健君が退院した。

何度もお辞儀をしてお礼を言う家田夫妻に、俺は「本当に良かった。これからは外来でお会いしましょう。定期的な受診と検査は欠かさないで下さいね」とアドバイスした。俺の後ろで後藤舞も健君に手を振っていた。彼らが病棟のエレベーターに消えると、舞が「本当に良かった」と晴れ晴れと言った。

翌日、外来をしていると昼過ぎに眼科外来から電話です。と看護婦に言われた。俺には心当たりはなく、何の用だろう？と受話器を取ると「忙しいところゴメン」と梅村智恵の声がした。

「何だ。どうした？」俺が言うと彼女は、

「今夜か明日、少し時間を頂けない？」と言った。

「今夜ならいい」今夜は舞が当直なので一人で夕食を済まさなくてはいけなかったから、ちようどいい。

「じゃあ、前に食事した中心街の『とり重』で七時に待つてる」

「わかった」

「じゃあ」彼女は手短かに用件だけ話すと電話を切った。

そうと決まれば、とにかく仕事を早く済ませないといけなかった。俺は梅村と会える喜びで張り切って仕事をした。途中で看護婦に「先生、絶好調ですね」と言われた。女の勘は実に恐ろしい。

中心街の少し奥まった通りにある『とり重』には七時五分前に着けた。去年の梅雨の夜に梅村と一緒に飲んだ小さな個室に案内された。梅村智恵は、すでに小さな座敷の出入り口側に座っていた。

「突然、呼びだしちゃってゴメンね」カーキ色のタイトスカートに白いブラウスを着た梅村が、すまなそうに手を合わせた。

「いや、会えて嬉しいよ」俺は正直に言った。

「まずビールでいい？」

「うん、喜んで」

二人、ビールで乾杯した。

梅村は今、郊外のアパートに住んで、週に四回ほど非常勤医として九時から五時まで働いていると俺に話した。俺は彼女に訊きたい事は山ほどあったが、彼女の話をも黙って聞いていた。

二杯目に頼んだ焼酎を飲み干す頃、梅村は思いきるように口を開いた。

「私…、未婚の母になったのよ」

「え！」俺はあまりの驚きで言葉を失った。一体、誰の子を産んだんだ？

「救世主兄弟って言葉を知ってるよね」梅村が言った。

「もちろん、よく知っている」

俺は家田健と卓の幼い兄弟を思い出した。あれは俺が差し金を引いて出来た『救世主兄弟』だ。本当にあれで良かったのか？と時々思う。でも現実には、死ぬ公算の強かった健君が元気になって退院できた。

「二年前に姪が骨髓異形成症という難病になっちゃって、輸血や造血剤の点滴入院を繰り返していたの」梅村はそこでフーと一息吐いた。

骨髓異形成症とは骨髓が働くなる原因不明の病気だ。白血病ほど悪性ではないが、骨髓移植をしないと徐々に貧血がひどくなっていずれ死に至る病だ。

「姪とは近藤先生の娘さんだよ」俺は念を押した。

「そのとおり。つまり私の姉の子。姉が死んでからずっと実家で一緒にいた姪は、私に凄く懐いていたので可愛かった」

「そうだろうなあ」姉さんと一番近い遺伝子を持つているのは君だから子供も懐くだらう、と俺は彼女の言葉を心の中で補足した。

「義兄の近藤准教授から、娘を助けるために協力して欲しいと必死

に頼まれた。私もこの子を助けたと思った」

梅村の話聞いていた俺の頭がパツと閃いた。自分の娘を自ら治療していた近藤先生は、自分の娘に骨髄を提供するドナーが見つからなかったので、窮余の一策として『救世主兄弟』を作成しようとした。だが肝心の奥さんは胃がんで亡くなり既にこの世にいない。そこで奥さんと最も遺伝子型の近い妹の梅村智恵に白羽の矢を立てたのでは？

「それで救世主兄弟造りのために人工授精を受けたんだ」と俺は言った。

「そう。できた子供は、義兄の子として一生面倒みると言われた。でも人工授精は思ったよりも辛かった」梅村は淡々と語った。

「そうか」

「その後十カ月間、自分の胎内で子供を育てるうちに母性本能と愛着が日増しに湧いてきた。そして自分の腹を痛めて女の子を産んで母乳で育てているうちに、この子は絶対に私の子供として育てたいと思うようになった」

「女なら、そして母親なら当然の感情だ」

「だから私は生まれた子を自分の子供として登録した。戸籍では未婚の母だけど、それでもいい。絶対に手放したくない」

「…今は幸せかい？」

「うん、この子のためなら何でもできるといふ気持ち日々成長している」梅村が微笑んだ。彼女の顔が輝いて見えた。

「君が幸せなら、俺は何も言うことはないよ」俺は好きだった女を奪われたような気分だったが、彼女の幸せが何より一番大事だ。梅村が今の状況を喜んでいいるなら、それを祝ってやるのが大人の男だと考えた。

「おめでとう」俺はやつとの思いで彼女に言った。

「本当にそう思ってる？」梅村が切れ長の眼を少し潤ませて俺を見た。俺は彼女の目を見つめ返した。

「私の一番好きな男はあなた」梅村が俺の目を見たまま言った。

そんな…、俺だってそうだよ。と言いたかったが俺は言葉にしなかった。それを言ってしまうと、何もかも崩れてしまいそうな気がした。

「貴方にホテルで抱かれた時、実は受精卵を妊娠して三カ月だった」妊娠中に他の子供を受胎することはできない。だからあの晩、彼女は安全日だと言ったんだ。

「あの時、貴方に思い切り抱かれて、身ごもった子が流産したら私は貴方の下に走ろうと思った。いや、子供が流れればいいとさえ、あの晩は思っていた」そう言えばあの晩の彼女は、胎児に悪影響のある酒もたくさん飲んでいた。

「…もしそうなら、姪子さんは助からない」

「でも、女としての一生を考えて迷っていた。姪を助けるために義兄の子供を産んだら、私は好きな男と結婚をする人並みの幸せは一生得られない。決心して妊娠したはずだったのに、私の心は揺れに揺れていた」

「葛藤だね。辛かったね」

「そう。だから、貴方と思い切り愛し合って、運命を天に任せてみたいと思った。賭けてみた」

「…でも結局、赤ちゃんを無事だった」

「そう。そして出産も無事にできた今は、女の幸せよりも自分の子と生きたいと思うようになった」

「母性本能は性欲に勝るといっからね」

「フフ、そんな言葉は初めて聞いたけど、そうかもね」梅村が笑った。

「先月、私の子から姪への骨髄移植が無事に終わったの」梅村が肩の荷を下ろすように天井を見上げてふと息をついた。

「近藤先生が執刀したの？」

「もちろんよ。先週、姪に骨髄が生着したので退院もできた」

「それはよかった」俺は、近藤先生が東洋病院で行った骨髄移植と

はこのことだったのでは？と思った。正式には認められていない治療法を、自分の勤める大学病院で始めればすぐに話が広まって上層部から止められるかも知れない。一方、民間病院で不妊治療もやっている東洋病院なら上司や同僚の目からは隠れて秘かに『救世主兄弟』を造り移植ができる。

「ところで梅村は何処に勤めているの？」

「母子家庭だから生活をかけてバリバリ働いているわ。平日の九時から五時は東陽病院の眼科で、週末にはコンタクトレンズ屋でアルバイトをしているわ」梅村の口から東陽病院の名前が出てきたので、近藤先生が梅村の娘から自分の娘に骨髄移植を実行したのが東陽病院だと確信した。

「子供は？」

「平日は保育園、週末は実家に預けてる」

「…ところで君はなぜ東陽病院で働いたんだ？ あそこは帝大傘下の病院のほず」

「やだ、うちの父は帝大出身なの」

「そうか、梅村のお父さんの口利きか！」

梅村の父親も孫は可愛い。しかもその孫は可愛い初孫、その子を助けられるならと全力を尽くしたに違いない。『救世主兄弟』の話有近藤先生から聞いた梅村の父親は、秘かに東陽病院で孫の治療が出来るように手配したんだ。これで梅村と近藤准教授にまつわる数々の謎がすべて明らかになったと思った。

「待てよ…」

家田さんは近藤先生の紹介で人工授精をして『救世主兄弟』を作ったと言った。日本では前例のない治療法を彼らは実現できた。

近藤先生は家田親子を、自分の娘の試験台にしたのではないだろうか。体外受精の技術を持つ東洋病院を梅村の父親から紹介されたものの、初めて行く治療は一度やってみないと自信が持てない。家

田夫妻が、俺の話した『救世主兄弟』について病棟で話し合っているのを近藤先生は偶然小耳にはさんだか、秘かに相談を受けた。近藤先生はそのような救命方法を家田夫婦が知っている事に驚きつつも、彼らを秘かに東陽病院に導いて救世主兄弟の作成を試そうとした。近藤先生の事だから夫妻にはきちんと説明して同意も取ったのだらう。

その結果、家田夫妻は救世主兄弟の製造に一発で成功した。これで自分の娘も救えると近藤先生は確信した。医学者としての冷静な治療手順と同時に、愛娘を救うための痛々しいほどの親心を感じる。

「もう私、帰らなくちゃ」腕時計を見て梅村が名残惜しそうに言った。

「もう？」

「うん、娘を実家に預けてある。私は明日も仕事だから朝から保育園に送って行かないと」そう言った梅村の目が何処か寂しそうに見えた。

「近藤先生と結婚する気はないの？ そうすれば養ってもらえるし扶養控除とかも受けられる」俺は自分の感情を押し殺し、梅村の心配をした。

「それはないわ。テレビで例えると近藤先生と姉は二人ともNHK。私は民放のバラエティみたいな人間じゃない？ ぜんぜん合わないわ」梅村は即座に答えた。

「うーん」

「それに義兄と一生を共に暮らすなんて御免だわ。私は一緒にいて楽しい人がいい」梅村はそう言って俺の目をじっと見た。まさか、俺と暮らしたいと言いたいのか？

俺は梅村から視線を逸らした。俺は今も梅村を好きだし憧れている。そして、初めて彼女を抱いたあの感激も忘れられない。梅村と一緒に暮らす事は楽しくて幸せだらう。

でも今の彼女を受け入れるには、彼女の娘ごと受け止めなければ

ならない。近藤先生の子供とわかつている娘を俺は育てられるのだろうか？

それに今の俺には舞がいる。今や彼女は俺の公私にわたる重要なパートナーだ。俺が何も言えずにいると、「ありがとう。…たまに会ってくれると嬉しい。さあ、帰りましょう」梅村は言いたい事を言い終えたのか、爽やかに微笑んで立ち上がった。

店を出ると台風の接近に伴う雨がスコールのように降っていた。二人の肩を雨が濡らし、俺たちは通りかかったタクシーを停めて乗り込んだ。

「去年も、こういう場面があったね」タクシーの車内で梅村が俺に言った。

「ああ、そうだったね」

「あの時、斉藤君に口説かれていたら私、どうなったかなあ…」そう言う彼女は窓の外に憂いに満ちた視線を移した。窓には無数の雨粒が叩きつけられては後方に流れて行った。

そうだ。あの時、俺がもっと強く行動していたら梅村と結ばれたかも知れない。でもそうになると、梅村の姪には救世主兄弟が生まれず死んでいたかも知れない。どちらが正しい行動だったのだろうか？タクシーが森林公園近くにある彼女の実家に着いた。「じゃあ」と軽く梅村は俺に挨拶すると、モデルハウスのような家の中に姿を消した。彼女に何か言ってやりたい。でも何を言えば良いか、わからない。俺はどうしたいのか？俺はどうすべきなのか？

後ろ髪を引かれるような気分のまま、俺は運転手に自分のアパートへ向かうよう告げた。

土砂降りになった雨の中を俺はアパートの部屋に帰って熱いシャワーを浴びて、それから小さな居間のソファーに横になった。テーブルの上には舞の医学書が置いてあった。舞と一緒にいる事は幸せだ。でも俺が本当に愛しているのは、梅村なのかも…

そう考えているうちに俺はまどろんだ。

梅村が小さな女の子と立っていた。俺に気がつく、梅村は大きく両手を広げて「待っていたわ。こちらに来て」と微笑んだ。

俺が行こうとすると、いつの間にか俺の横にいた舞が無言で梅村を睨みつけていた。

「先生」妙にリアルな夢から目覚めると、舞が俺の前にいた。

「こんな所で寝ちゃって、風邪をひきますよ」舞がやさしい笑顔で俺に言った。

「ああ、いつの間にか眠っていた。あれ？ 当直は？」

「もう朝ですよ」そう言う、舞は俺にかぶさるように抱きついてきた。

俺は何か執りつかれたように舞を押し倒して裸になると、狂ったように舞を求めた。彼女も激しく反応して悶えた。

俺が熱い彼女の中に押し入ると、舞が「下さい」と形の良い胸を震わせて言った。もしもこれで子供が出来たら、それが俺の運命だと五感で感じた俺は思い切り舞の中で果てた。二人とも汗まみれになって、息を切らせて横たわった。

しばらくしてコーヒを淹れようと起き上がった窓を見ると、また雨が降ってきた。朝の雨が水色に光った。

起きてきた舞が雨を見て「きれい」とつぶやいた。俺は黙って彼女の肩を抱いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2066t/>

水色の雨

2011年6月16日23時25分発行